

椿説弓張月

残篇

五

~13
2000
29



13
3908
29

鎮西八郎 椿説弓張月残編卷之五
為朝外傳

東都

曲亭主人編次

第六十七回

芭苴を憐て王女淑を示そ
童謡を聴て為朝別を決そ

安徳天皇の壽永二年癸卯の夏四月為朝父子の武徳およつて
矇雲首被授て後の三省さへて言事なりたりおられもこの國も王位
の事さ定ふされぬ松壽紀平治ホの功臣いふさらしんかたに賤夫山兎ホ
まうといと形なくありふ経ホ亦五六年の春秋を行て大日本母と平家
既滅亡の後鳥羽院の世を御りて文治三年といふ春の比琉球属嶋
の酋長材太夫の年首の拜賀の乃ホ大里中城浦添へありし泊の
宴館に送笛の年未諸延の貢物の為朝をさりち八田亀仰て

椿説弓張月拾遺篇下巻之五

龍宮城の宝庫へ収はし。も。ありあつてなうりく。有。一日泊の漁翁
ホ林大夫。客館へ入てし。あやう。つう。浦人の世々の國王へ供御の赤目魚を
獻らしし。今。母。子。これを。信。ち。さ。う。げ。ある。変化の。際。を
と。亡。う。せて。國。の。豊。小。民。の。肥。ゆ。く。人。も。た。ら。ず。り。て。平。民。お。の。く。業。を
樂。し。こ。妻。子。と。安。う。く。に。養。ふ。と。み。な。星。八。郎。君。お。人。親。子。の。御。威。徳。お
よ。れ。か。こ。の。飲。び。を。ま。う。さ。ん。と。ん。あ。ひ。さ。う。推。系。の。よ。と。る。あ。れ。か。を
の。外。の。野。の。年。月。成。区。し。ゆ。ひ。た。あ。う。お。今。曉。の。細。引。舟。い。し。奇。ある
人。魚。を。獲。う。る。信。々。く。倘。人。あり。て。人。魚。の。肉。を。一。し。び。噉。へ。その。人。の
壽。命。疆。り。は。し。と。か。ん。こ。つ。つ。松。小。さ。ん。た。物。さ。る。海。の。只。速。母。大。里。へ。獻
ら。べ。う。あ。ふ。じ。太。夫。の。國。お。大。功。あり。且。野。の。属。嶋。を。管。領。し。な。ん。ば。
漁。獵。う。へ。い。う。あ。は。て。中。と。え。た。よ。五。倍。の。為。母。こ。の。よ。り。を。汲。り。て。し。と。ひ

てんや。と。信。中。り。も。う。ち。か。さ。ら。ん。が。林。太。夫。で。あ。う。く。その。心。操。を。撰。噴。し。
一。銭。あ。も。及。び。を。して。快。く。議。ひ。し。る。漁。戸。ホ。飲。ひ。つ。件。の。人。魚。の。苞。直
として。大。里。へ。齎。し。ゆ。が。林。を。失。す。る。裡。よ。入。り。て。縁。由。を。尋。ね。ま。う。ら。ひ
と。叮。嚀。し。為。朝。の。法。ぐ。と。う。ち。や。て。微。笑。し。人。の。餌。さ。あ。年。と。積。で。懶
た。う。の。養生。も。な。う。め。幾。人。魚。の。肉。を。食。さ。す。も。只。一。日。の。餌。さ。あ。り。て。
長。壽。や。ん。て。と。有。る。じ。泊。の。漁。夫。お。心。操。の。い。し。も。賞。を。入。り。さ。せ。られ
ども。つ。れ。國。王。お。あ。う。さ。れ。ひ。し。り。故。よ。受。う。じ。と。か。く。中。城。へ。り。て。と。あ。は
る。し。と。仰。し。か。林。太。夫。羅。ま。し。て。その。旨。を。傳。へ。漁。戸。ホ。ち。う。く。及。り。た。
あ。う。く。平。を。失。ひ。し。つ。亦。ち。う。く。と。中。城。へ。持。ち。来。し。つ。毛。國。鶴。お。就。て。緯。の
慈。を。傳。え。あ。げ。か。は。王。女。も。又。これ。を。受。ま。う。じ。と。れ。八。郎。櫻。司。の。妻。を。り。
大。里。こ。う。う。受。ま。う。ら。ね。物。を。な。し。と。め。へ。進。じ。し。る。と。ひ。も。う。け。は。し。と。

春。元。長。月。拾。遺。第。一。卷。之。五

こととて。女が推返さしむ。いふ漁屋のせんをばかしく。亦浦添へぬ。

 八町磔ふらち歎死て縁由とやえあつた。舜天丸を彼人魚の

 ほとの人もあはしむ。ついで家君北堂受あつた。この芭蕉を舜天丸

 さうして受るやうやあはれぬ。いふ大里へ進じて。まは受まらぬ。中城へ

 進まざるこそ時宜ふも稱へ予があることにはあはれとて。呻吟し説諭に

 推返しむ。いふ漁戸も進退究り。とせんか。せんたらち譚へさめ。

 舜天丸の字もあはれなれ。いふこと。いふも亦大里へあつた。中城へ

 立ち上り。後。いふ箇所の往還。五六日を経り。頃。夏の日の炎暑

 小江。いふ人魚。既に腐爛。臭氣。鼻を向く。いふ。いふ。いふ。いふ。

 果。人魚を道次。捨て。衆ら。泣て。そわろりける。舜天丸。いふ。いふ。いふ。

 返さ。目。と。亦。紀。平。治。を。召。び。て。ま。ら。ま。ら。泊。の。浦。人。魚。と。獲。て。長。生

不老の餌菜と稱して大里へ献せられたり。父終て受あつた。中城へ経

 亦こゝろ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

 哉。せ。む。但。山。海。經。卷。二。丹。水。の。東。南。に。流。れ。て。洛。水。に。注。り。其。中。に

 水。玉。多。く。人。魚。多。し。注。し。人。魚。の。如。く。は。して。四。脚。の。り。又。臨。海

 已。并。物。志。に。い。ふ。く。以下。載。干。人。魚。の。人。魚。似。く。長。三。尺。嗽。べ。つ。ん。と。い。ふ。又

 集。異。記。に。決。水。の。龍。彦。山。に。出。て。東。流。し。て。河。に。注。り。中。に。人。魚。多。し。又

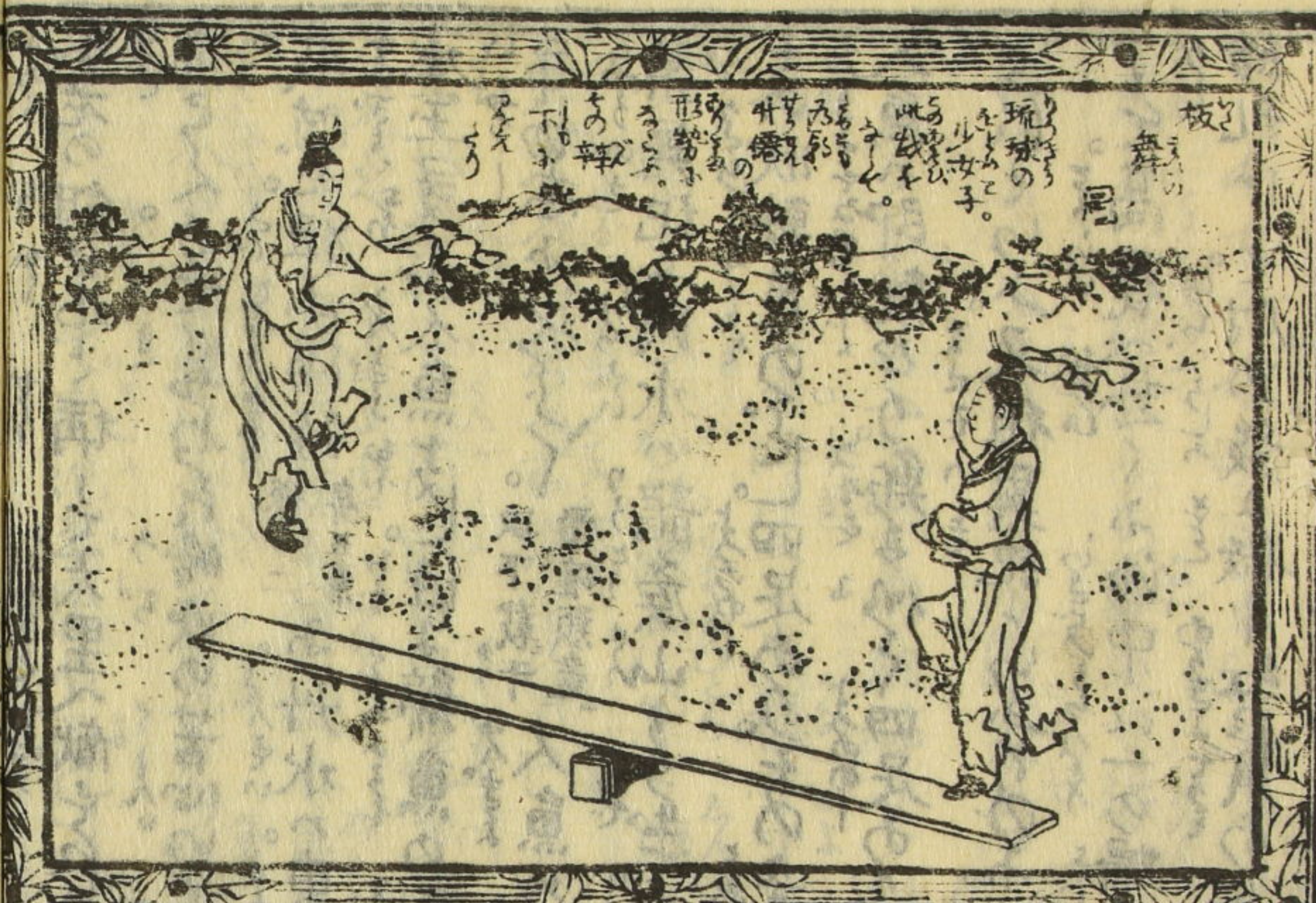
 その。状。鱗。魚。の。と。し。四。足。あり。その。音。嬰。嬰。の。如。し。食。へ。ん。疾。疾。に。或。は。い

 人。魚。の。即。鯢。なり。鯢。も。似。く。四。足。あり。小。兒。の。啼。が。如。し。今。亦。鯢。の。如。く。鱗

 と。い。ふ。又。祖。異。記。に。い。ふ。の。侍。制。官。查。道。と。い。ふ。の。使。と。奉

 了。て。高。麗。へ。赴。く。小。沙。中。に。一。の。婦。人。を。見。り。紅。裳。に。て。雙。祖。の。髻。髪

 紛。乱。し。て。肘。の。後。に。微。紅。鬚。あり。查。道。後。者。と。て。扶。て。水。中。へ。入。り。



拜手感恋して没する乃人魚といふ也又誓神録に謝仲玉よりありの
 婦人の彼中より出沒をばをるるに腰以下のみる魚なりといふ之り諸
 説が如くといふも世俗の稱をばごとく人魚を噉ひく長壽するは
 と見る所は実日不老の仙丹なり其の舜天丸が調理して家君
 家母に進むせざるんや君子の時かかぬ物を食せと況て異物を嗜む
 ことなし世俗の訛に傳ること今更信をばくはといふも但公のたは
 今故なくして海濱に異形の魚を生と吉凶を以て定めがに 彼人魚の形
 をこれに腰以上の婦人お似たり痛くは先妣の彼の底に身を投めて
 ちや十餘年経多ひぬまを今彼人魚をるるも先妣のさゆいと
 むのし頃日ハ事小紛且て中城へはりともあはば王女の起居を伺へば
 准後せよと云ふの紀平治以下の近習をばて中城へと藝れ

春説馬場用抄遺篇下巻之五

されば朝の浦人を推へるも此の日の越来よりなるは
 松壽がよりのしうの魚の身をばえ志して亦宮の母り。又既に浦人ホッ
 苞苴を受ざれば王女もこれを受ざらん。王女受ざらん浦人ホ又浦添へ
 りてゆらん。秋ありのしも舜天丸が彼苞苴を受べればやかくれ踏次の往還
 不煩あらん。彼浦人ホう恩をかりひ惠を謝をば苞苴を推返さのこゝろで
 彼ホをいらく苦んハ豈痛びたるるや。直中城へ赴れて便宜就て
 利害を説き王女もさめて中山王の位を定むべらかりあり。陶按司も
 りろともいひぬれり。と定むるは松壽ハ志う終へしと回答せしむる。爲銘
 とまのち詰旦大里の城を出松壽を伴ひ後者をお七馬の足掻をたらや。あ
 けの次の日中城へ到りし。王女ハかくしもありたまふと苞苴の魚
 腐臭て浦人いし。本意を失ひゆりもはせせみみおりともよく歎く

ばしを傳へて六顧み歎息し。道の終州ハ道なきに賤民淳朴あり。之
 忠信の志篤しをいさむ。國ハ王なれば彼ホも其身を失へりむ。應神
 天皇の崩御多しと云ふ。二とじらの皇子とや。はと貴王子のおん名は
 鬼道稚郎子尊とせし。野王子のおん名を大鷲鶴尊とせし。以同職
 位を譲り。野の年を経多しと云ふ。野の年を今を身も。あひあひて
 かこくも難波の浦に宮柱をすじ。建仁徳の聖の王の威徳を仰
 げハ高津の百名城にけぶる。いあふ孫ども。慈母尚寧王の嫡女王女と
 稱せられつ。あひとの故をりて年尊位を空して。この國民を苦めたり。
 ちあもかくの八郎按司おす。めて王位は即ちわたりし。民の王を果さる
 包し。持ハ大里へ走る。きて苞苴の魚あなかりて浦人ホち歎く。縁由
 をせえ。あひの行をす。とて口官をがした。あひの。

為朝ハ松壽公招こころる。大里より來りて、
 浦添よりぞ來りて、
 後堂ハ胡座を設てみづからこれを迎つ。そのこより
 こそ名ひ傳りしつる良人も、舜天丸も、
 ちやあゝんぞとて、
 多ひて善心なれざる容を拜し、
 の増後ハ松壽公ハ、
 王女ハ對して泊の浦人ハ、
 芭直のふふよりて、
 も又父と志を存く志て、
 如し今や國より治りおとれど、
 なく射るるは、
 王女ハ國の世子、
 即ち之。かくてもいふ、
 られざる自の別を、
 を避公られ、
 熱也王女と人ハ、
 別れもいふ、
 を恩愛の争、
 年月をたつ、
 武徳を想、
 世ハの龜鑑となり、
 文あり武あり、
 智勇あり、
 正鵠

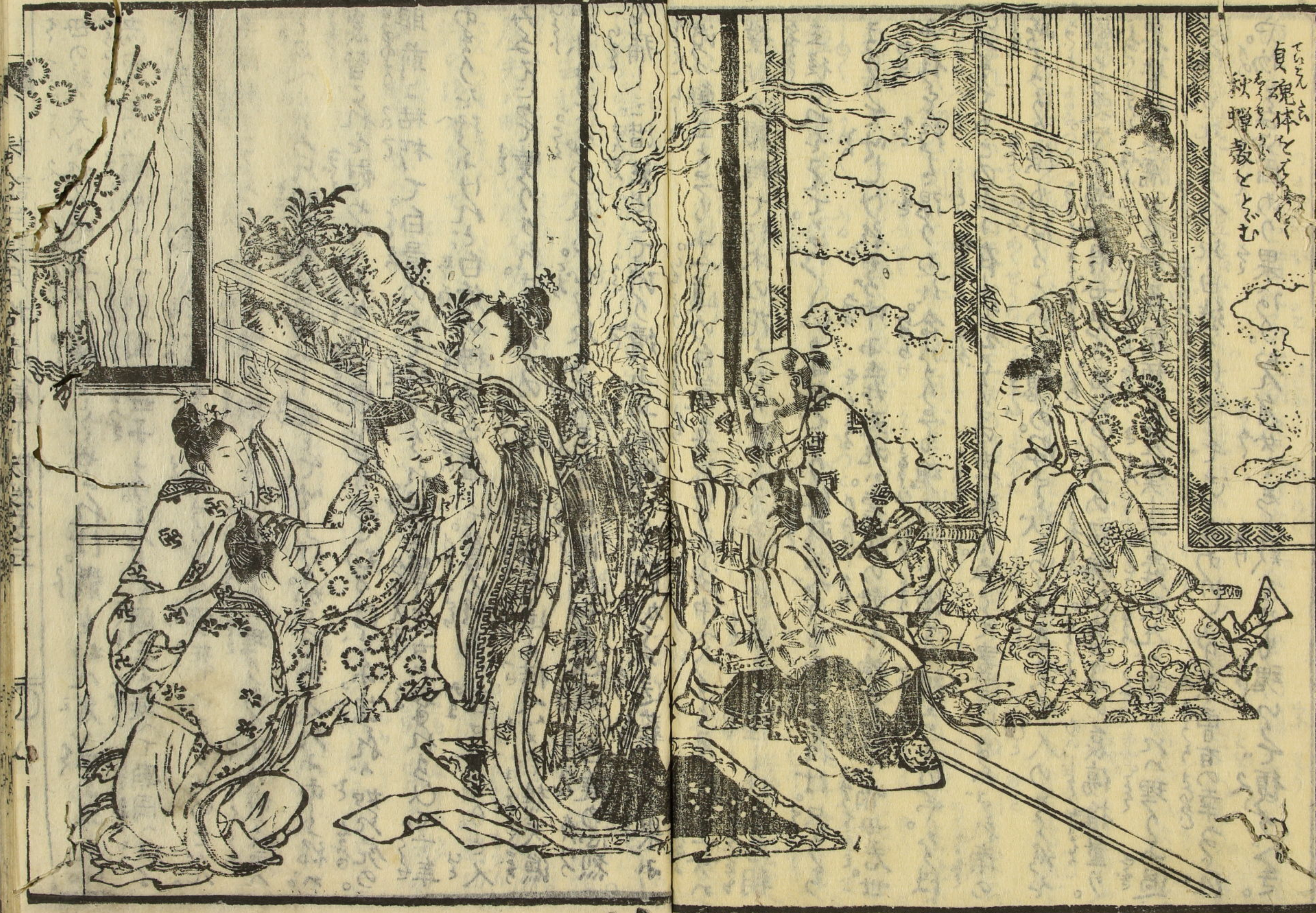
なく射るるは、
 王女ハ國の世子、
 即ち之。かくてもいふ、
 られざる自の別を、
 を避公られ、
 熱也王女と人ハ、
 別れもいふ、
 を恩愛の争、
 年月をたつ、
 武徳を想、
 世ハの龜鑑となり、
 文あり武あり、
 智勇あり、
 正鵠

皇極經世一

一人を措け子に肉を食せし日縫がなごりてこの國に王の命を
 せしむるに證据なきその疑ひは鮮がさけん倭は十あまの二
 とせしむる前つ権安元二年九月二日倭臣利勇が下知よきごとひ怒を
 聚ふ悪少年ホウ寧王女を嫁んとて山里近く越来の石橋よりあ
 られ真鶴が雄しくい働れ物をもせぬ敵は多勢と共ちう真鶴遠
 懸れ一人の悪少年王女の頭髪を搔纏えて退さぬふりせせ
 一人の劔を因して王女の胸前を刺す所なれば仍も堪て立地
 鮮がさけりその空蟬の裳脱の殻へ白縫が魂入りて悪少年ホウ
 種々の艱苦を修りていざも終は丈夫に環會するふきと再會し
 志をいじたり疑はれこれ又多といひひりて身を起し繼に尤友
 うたもき多へ目今刺されし太刀痕乳の下より背へひきさごと

清る鮮血とこもふ一道の白氣をのけりて空中へ入ると見えし王女の
 撲地と輾轉て朽木の花としりりさす月のあられ果るを怪しけし朝
 主後これをえてさういふとむろに救へるもあがれば只ら
 まりのていしけねる中お弁天丸の裳脱の殻を抱き起し喃母君世
 お在るを限りぬ命なりとも魂の人お憑て神あはれや。なほ
 りりてこの土お在るをいふるりの孝類をなごて盡しはるる南の
 崎よりの浪もゆるといふ魂のぬきびあふさるり人のこころを
 慰めし人やは喃母君と志はれり招魂ひ孝子の哀傷推量り
 衆皆袂を濡さるる朝頓お嗟嘆しる弁天丸が悲しむ理りお過
 されども死にきくれば白縫がけがさるるあまのりる。未曾有の幸う
 や。物も必用あり果なり。おん女を去り歎くとも魂いりて復たなき

春説書長月合遺篇下失巻之五



ていん
貞魂体とて
秋蟬散ととむ

本言正見尺牘集一竹巻五

七

母の魂天に送りて王女の軀をとりめされば骸とて人骨が母よありん
 尚寧王の嫡女にして則國の世子なり。まろく國王に擬へて廟國へ送る
 を。惜しう船天孫氏の正嫡とてや終りたり。まろく縁葬のことなりとせん。
 毛國鶴ホころろぼよと叫喚ふ渝しる人ハ舜天丸ハ理りある。父の辞は寧人
 とあへどめられ袖の露もほや一洗してゆしける。かくてあえねあふ糸バ
 衆皆これを慰めり。王女の亡骸をとりおさむるはとれ生れが如死の
 眼前に枯朽て白骨のこを残りて現に寧王女ハ替れり。十年
 わまりを替ふけれど白雉の神冥合體して舊の形めて在せりなり。と人
 みるにじつを嘆りつれ。されがら一條の奇蹟を遙く傳へて樵夫漁
 戸ホまてをのれも。公なりも。或ハ王女の恩澤にあり。或ハ白雉の心烈
 を痛し。潜然として涙り。續ふ耳を側するは。かく送葬の果ホ
 けられ舜天丸ハ浦添より七日毎ハ廟國まで。のち日月もさつことをさく。
 夏去秋添を九月の比よたるの降そく。霖雨ハ富新河の堤崩れて
 農夫ハ畔作の便を失ひ旅安ハ道を去あへざるは。その所ありし
 件の堤を築せんとす。為朝みつろ大里より。佐敷西原越来の間切
 を巡歴し。人ハ松寿も又城を築く。郷導に。かくて為朝ハ富新河ハ
 赴れて役下を興じし。金武の奥松は遠田して堤の修復をいせし
 ら。ゆめ彼此の村民ホ招されども群を争て。水を堰土を運び日おだ
 まる。築きてとる。あつた。毎日本河の畔ホ立て村民ホと勞ひ
 まふ。一隊の童子ホが。そのは。りを徘徊して。
 神人來兮。 富藏水清。 神人遊兮。 白沙化米。
 と謡ひけり。朝ハこれを。大里ハ。り。る。ど。や。く。浦添の城ホ

春の記 長月 合資 夫志之五

入りて舜天丸は對面。富孫河の堤のりみかたに成物うらりて。さて富孫
 中う。せしめつる。乃て漂泊。ける比南風原へ赴くとて富孫河を打渡。
 小河の畔小童子亦聚ひて神人未分。之と謡ひき。ちる。今茲乃躬
 が。めらひ彼処へ赴け。又童子が謡ふ。當初亦異る。乃て。かき
 て。里謡の未歴を推量。之れ前つ年巴麻嶋。神仙を訪ひ。とれ
 仙童が。いへる。こあり。今より六年を移て八頭山。亦登れ。乃て師。彼山の
 巔。行る。乃て。記して忘る。乃て。教。て。こ。ひ。おれ。今。や。時
 到れり。これより直。八頭山へ赴け。神仙は見え。あ。り。を。あ。ん。身。も
 り。あ。も。に。登。山。て。道。顔。不。思。入。恩。惠。を。拜。謝。之。後。の。吉。凶。を。問。ひ
 多。か。し。と。見。入。舜。天。丸。の。眉。ら。ち。頓。あ。や。あ。り。仰。ふ。侍。れ。も。昨。夜。の。夢
 の。何。と。な。く。と。い。は。れ。し。侍。ら。り。壁。が。南。山。の。高。木。あり。その木。忽。地。地。を

とあれて天へ升るといふ。乃て。この吉凶を。い。ひ。し。周。公。旦。の。お。ん。子
 伯禽と。おん。身。の。庚。叔。と。り。あ。も。に。周。公。は。見。え。あ。あ。と。い。ひ。入。え。て。二
 と。い。ひ。さ。が。う。答。れ。ま。ひ。け。り。その。意。を。好。も。曉。る。乃。て。高。子。と。り。あ。り。の。ま。同
 た。ま。へ。高。子。と。り。あ。り。教。て。い。ふ。中。南。山。は。橋。梓。と。唱。る。二。木。あり。い。ん。て
 観。ま。入。と。い。ひ。し。乃。二。子。と。り。あ。り。は。れ。ま。く。南。山。は。赴。れ。つ。橋。梓。の
 二。木。を。親。ま。の。乃。橋。木。を。高。く。して。その。木。を。仰。ま。い。く。梓。木。は。實。して
 俯。れ。が。ど。し。ま。ぬ。り。て。その。は。し。と。中。が。高。子。に。告。ま。へ。高。子。と。り。あ。り。高。子
 乃。橋。木。は。仰。ま。高。く。と。れ。則。父。の。道。を。梓。木。は。俯。ま。實。し。ら。り。乃。則
 子。の。道。を。汝。達。父。子。の。道。を。と。ら。ぶ。の。故。と。告。れ。ら。り。と。叮。嚀。し。説。諭
 せ。伯。禽。庚。叔。と。し。め。て。曉。り。て。又。周。公。は。見。え。あ。あ。愛。敬。礼。讓。悉
 子。と。り。の。道。を。い。ふ。周。公。飲。び。ま。り。の。と。ぞ。か。れ。ば。父。の。道。は。壁。し

南山の高木が地をこぼれて天小舟るとゆふにことふかかりて快ふに
 八頭山に登りて彼神仙を訪ふふこゝの時もあふ。且くあひさき
 多くと舞を盡して練ゆるべが為給呵とらち笑ひあふと別々
 みる天機あり。今八頭山へ到らばとも命殺らるる場なま。おん身
 田んや夫國と流るりの人を知るを誓ふに。よく人を志れと死に又
 よく人を用ふことあり。よく人を用ふと死に奸邪遠ざらん。流るるに
 才のおん身及ぶ。あれども智ゆるものいづく。十里の外ふと雷も
 笑えど。惟牆の外ふり物さるるえと。早目を修むる西に。ともも
 されを志るふよし。さればあや聖王の俊徳を明く。凡君たるの好
 憎あれば有職のりの職を捨て好むふ阿るりの阿るりのふ過あれ
 ども好むふればその君咎む。君まら法を犯して後。臣も又法

犯し。侮人時をゆることまろ。夫々の如くして。その國七びぶら。彼
 毫舜の聖人く。あられも牙ひとつ。二十官のふとひせと。國の興
 と滅る賢と重く用れと侮をふく愛と。但との二の外ふと
 ちのう。おん身も。あつらるるべし。松壽の漢の陣平や似る。彼えと宰相
 の才あり。紀平治の樊會。周勃を兼勇ありて忠義篤。よやく大将
 軍ふ任と。鶴亀の孝子なる。夫孝の百行の本。國司と。各政
 ありん。おん身才あり。智ありと。あつらるる。その好むふ泥と。あつらるる人
 と疎く。なまば。名教竟おまが。し。けれ弱官のむし。弓馬と好む
 学問せと。今武は。文は。射藝と。説りの強弓と。て
 清ま。のこ。武は。疎ま。の。憶脱なり。大約武器の。主
 相恋と。可と。稱は。只。勇。人。と。て。力。及。ら。ね。長。劍。を。好。む。

或ハ重ク具足を鑑ヒ敵の耳目を驚さんとして臂も構らぬ強弓と
彎りの戦場の働ハ自在なること。亦かく命を覆とてこの朝然角
のしほしより強弓を好るハ自然の膂力ハ合人ハ之。亦かく保元の敗
軍ハ囚徒となりしと信西が討ひて腕の筋を抜れしは矢束と彎
ことじめゆが且り。亦かく既ハ衰へて弓も又分と減せしが弓勢ハ衰
つど物を徹とと徹しはざるハ弓の強と弱きよらに射ののこは煉
ゆあり宣ひたるハ八幡殿ハ弱弓と好しめ人とう勢天下ハ敵ありし
されハ國を治るもこのさうせぬることあり人國君強を好とれと
民窮と民窮とれハその國亡ふ民の後を疑くとハ國の強と弱と
ふありに賞罰進退その度と稱ひて万民徳を慕ふよありよとく
さう好もさう。その外ハさうとはと説示。さうの宝劔と年

てあられしうとあり出でまはさる鼻天丸ハ附属し次の日より好く
一室ハ引移して七日奔し多ハ紀平治松壽鶴亦ハさく龜林大夫
もとや或の藝を傳ひて浦添へ推し八頭山の供をそ懸ひたるかくて
その日ハありのければハ為銅ハ腹巻ハ朽葉ハさの狩衣と金他の太刀
を佩し白馬は跨りて遂ハ八頭山ハ赴れ人ハ鼻天丸ハ汗衣の上ハ高踏
の太刀を佩松壽紀平治鶴龜同胞林をまのりりものこる歩行よりそ
後ハ既ハ藝ゆめありしハ為銅ハ馬より下りて後者を好しとめ
長壽白眉の仙公羽頭の長くして身ハ半ハたれハ白羽丹頂の鶴ハ臂ハ
ゆとして巖の上ハ止しなりとゆハ為銅主後これをえを向ひ前とて拜し
あまハ仙公羽扇と抗て為朝親子とさし招くハ為銅ハ香ハ焼く

春説記長月拾遺 十一

徐也るふ歩るふり某浮浪の身なれども我おはてこの國の賊乱を
 平けし全く神仙の冥助ありり如以舜天丸は始るび會しあへる
 こと欲び速も盡しがじ願く道号とあじしめんと宣へ舜天丸の
 紀平治とありとも額づれて再生の恩を禀まがら報ひするは
 ありしがそらも後も道顔をぬらび拜しする幸いとも甚く之懇
 小演のへ松壽鶴亀林たす亦もふうくするを拜せり當下仙を
 文ふる舒らち對ひやされ八郎されは源家も舊れ好あり亦只
 源家のこさふに神代ありして日の本お好ありのなりじまらそ
 縁故とらんされこの國開闢の祖天孫氏の父として世お天孫と稱せ
 られ彼阿摩美久といふりのもされ天地お道違に到れる亦名を異
 めと海小ありて海神と稱せられ國お在て君真物又唐山はたぐれ

日へ南極老人と唱られ世俗へ福祿壽仙と稱とされ南極と唱るは
 と流求へ南海の極なる老人とあはれ後世好事のりの南極
 星は配たり又大日本すれ武甕の神名川伊豆の石郎お落をたぐ
 その地お落長鶴村の名を遺し或へ忽魚日摸斯祖法見木の夷狄の國
 ふて愛せ鹿を世お福鹿と唱あり又あるとれへ赤卯洞のほら
 ふもむびくふその地をやがて福祿と名るはしハ書籍に載るの志うれ
 唐山隨の世ふつら姓を謬傳く歡斯乃を氏と記し渴刺兜を名とある
 せしよりこの國人も此アを受て地こらるひるりの多うり歡斯乃と
 上代お所云君長ののりして後世王子とらんごと唱へ間切の領主を
 按司といふも歡斯為の神語とこの國開けをわしとれ一男一女化生
 とれその男の神はつれるればわれ小三男二女ありり彦火火出見尊

鉤を求めてこの國へ来りしとれ長女君々の尊にありしとてさうり
 豊玉姫と云はれつ。遂に孕る事ありて鶴鶴竹葉不合尊と産むるを
 ふくく養ふ事ありて日本より脱てゆりし二女祝を進じて皇太子
 を養育せしむれば王依姫と云はれり。此の因縁より嫡男は天孫の姓
 以賜り世ふ天孫氏と稱せしはさればつが流求ハ神の御代より大八洲
 の偏國にして種嶋と唱るより度火火出見の言の瀧をつが女児の腹ハ
 宿せ故ふ名とてさうれお後の人ハさう種が嶋より松出して流求へ往
 還せしはその地由て多羅國と唱るとの事あり。かくて四緯
 ハ宏は徜徉して寿命天と齊しく迹を巴麻鳥おさむりども
 ちやく日本へ往還せされハ康平六年春のころつが愛する鶴放れ
 陸奥へ移ししとれさうの乃傷られてあさく人は獲られり。

時ハ源頼義朝臣鎮守府の將軍として奥列に在任し頼義の嫡男八幡
 太郎義家前九年の合戦に討れり敵味方の菩提の乃お夥の鶴の
 足お金の牌を乞ふ放生會行じらばつが落も又その中にて巴麻
 尊へ入りしは我が家の心操と感するあり後々て件の
 金の牌を去どかくて又九十八年の月日と行て近衛院の又壽元
 つが鶴あさく東遊して木綿山ありしとれ霹靂は響きて金の牌
 を樹抄おからし命も既ハ危りして乃朝お助られ巴麻鳥へ入りし
 には義家為教祖孫二代の恩恵を唱り感佩せし。つが故ひさりぬ
 かくし終つハ八郎ハ君父の仰黙止がじとて放せしつと捕獲るる
 潜せりよこの國よりいづくすまわら忠孝の志の燈火をさしつが王女
 の配所よ遣し輒くこれを為朝ハ獲ししそのら大嶋の編居と訪し

詩を贈るとて、心より更に来嶋は影向く、三郎の長女が自殺す、其時
 ころののり、又、そのころ、あつた、その恩あを報ゆるふ足らざれば、姑巴
 乃て舜天丸が必死を救ひて源家の重宝、兵学の秘書、伝授す。
 遂に、其子、を擁護して、蒙雲を撃つ、亡はしむ。されば、舜天丸、世に生れ、
 蒙雲が幻術行れ、彼、その前、改む、か、けられ、ハ、マ、が護れ、のみ、か、つ、
 天照皇、太神、八幡太神、阿蘇明神、瀬岐の金毘羅、崇徳院の神靈、
 白旗の上、出現し、軍威を祐め、ひ、し、も、その神徳、又、あ、た、さ、て、も、つ、
 流求、の神代、海宮と唱へ、人の世と、なり、て、の、後、ハ、これ、を、南倭、し、唱へ、
 され、唐山の史、み、ど、に、倭と稱され、ども、大日本の國史、ハ、あ、ら、う、る、こ、の、あ、れ、
 とも、これ、南倭、の、こ、の、世、して、つ、が、流求、と、年、て、い、ふ、の、こ、又、多、觀、國、も、多、尼、を、
 とも、掖玖、も、奇、界、も、唱へ、し、も、奇、界、乃、奇、怪、也、と、の、國、奇、怪、の、み、多、
 今、ま、て、い、ふ、琉球、の、史、ハ、漏れ、と、り、且、く、い、ら、ば、推古天皇の、九、四、年、夏、立、月、
 夜、句、七、口、末、之、秋、七、月、亦、掖玖、末、之、夜、句、と、い、ひ、掖玖、と、い、ふ、も、も、南、嶋、
 の、こ、の、り、也、か、つ、て、天武天皇の、お、ん、時、ハ、倭、馬、飼、造、連、等、多、祢、嶋、之、使、
 せり。二十二年、と、ま、う、に、秋、件、の、連、亦、困、人、を、お、て、す、り、と、地、の、圖、ハ、獻、と、
 多、祢、嶋、所、習、流、求、と、ま、て、元、明、天皇の、和、銅、六、年、ハ、及、び、て、ハ、南、島、の、
 諸、嶋、内、附、也、これ、より、十、餘、年、前、文、忌、寸、博士、譯、語、諸、田、多、多、祢、國、
 へ、使、せり。その、こ、ら、文、忌、寸、博士、ハ、と、て、八、人、兵、を、お、て、こ、の、地、へ、赴、え、し、慰、
 撫、し、る、が、その、明、年、多、祢、掖玖、奄、美、度、感、人、ハ、博士、亦、ハ、隨、ひ、ま、り、て、方、物、
 を、獻、進、す、位、を、授、祿、を、賜、ふ、と、お、の、く、差、あり。これ、ハ、文武天皇の、三、年、の、
 り、み、り、也。この、こ、ら、又、三、年、孫、也、多、祢、人、ハ、命、お、た、が、ふ、と、あり、と、て、兵、を、隨、て、

悉く伐至け校戸を置けこれ大室年中のとうとぞおぼえらる。
 こゝより奄美の阿麻跡度感の今の徳をゆめて。琉球の属島に。
 このころ大宰府に詔して位を南嶋の人を授録を賜ふて差あり。是の
 慶雲四年のころに後亦南嶋奄美信覚球美亦五十二人大朝臣遠建治亦
 隨ひ方物を献る。これ元明天皇の和銅四年のころなり。こゝより信覚
 とす。即今の八重山なり。球美の今の久米嶋に後七年にして位を南嶋に授
 めりて凡二百三十二人あり。差あり。これ元正天皇の養老四年のこと
 なり。後又七年母と南嶋人百十二人奉朝と叙位せしむ。こゝより差
 あり。これの聖武天皇の神亀四年のころなり。後七年にして大宰大貳
 小野朝臣老高階連牛養と遣して石を南嶋に植さし。その地名の
 あり。所里数及泊船の水を取らんと誌せり。これ天平七年のころに
 あり。

後亦九年にして大宰府に詔して南嶋をのみ後建し。ひかり。これの
 孝謙天皇の天平勝宝六年のころなり。かれは當初流求の渚島を
 大隅に隸して能満益救の二郡とす。ひかり。文武の天室年中の
 現お日本の部内にて伊豆の七ヶ所異なるに。されは類聚國史第百
 九十卷風俗の部に。國操大隼人。多祿南島。掖玖人とす。并し
 殊俗の部へ入るれども。嵯峨天皇の弘仁元年秋八月癸巳僧良勝を
 多祿島へ流し。あま女と同車とす。故に又近属法勝寺の僧都俊寛を
 鬼界へ配されり。平家永を傾んとせ。故に多祿といひ。鬼界といふ。南嶋
 の總名なるは。前亦述べて審く。以あらう。孝謙天皇の天平七年五月
 廿三日の格。あま瀬嶋の郡亦先例に依て。依て以聽され。惜む。淳和
 天皇の天長元年秋九月戊申。大宰大貳後四位下。小野朝臣奉守が

大隅國小
 嶽を傳へ
 言ひ日本
 後紀卷
 十又三代
 實派卷
 二十八
 日

議して備多嶽島ハ南のうと海中小居て人兵弱し。國家ハありて杆城
 小あふに。又嶋司が一年の給物ハ稻三万六千餘束。准志貢調ハ鹿
 の皮一百餘皮更別物。名ありて實多。損多。益少。とす。世
 うば。遂ハ多嶽島と捨られり。これよりして天朝へ。素ら。胡越の
 を。あ。と。い。へ。も。今。こ。そ。あ。れ。後。ら。亦。必。也。日本。の。属。國。と。な。り。た。ん。故
 いろ。あ。と。な。れ。ば。こ。の。國。大。古。の。時。也。一。の。彦。火。火。出。見。の。恩。澤。を。被。り。今
 亦。八。郎。の。武。德。を。活。り。恩。を。蒙。り。て。恩。成。さ。し。に。ハ。禽。獸。も。も。芳。止。り。
 孰。く。そ。の。本。を。忘。る。べ。し。あ。く。れ。ど。も。八。郎。ハ。蓋。世。の。義。士。な。れ。ハ。生。を。食。ひ。榮。利
 よ。ま。す。に。君。父。の。仇。を。撃。つ。る。を。恨。と。も。君。父。の。仇。を。忘。れ。ど。も。あ。の。國。ハ。田
 ろ。く。ら。に。あ。く。れ。ば。こ。ろ。小。王。と。り。の。ハ。舜。天。丸。の。外。誰。く。あ。ん。あ。く。ら。に。や

今大日本あり八郎の兄我朝の子前兵衛佐頼朝蛭が小嶋に我兵を揚
 る。平家と西海に討滅し。日本國の摠追補使を補せられて佐階二位ハ
 昇進し。乃ハ鎌倉ありおつ。六十餘國と管領せり。あ。く。れ。ど。も。こ。の。人
 の。子。孫。さ。ぐ。く。孫。人。と。も。あ。え。を。天下。の。控。か。お。つ。ら。北。條。が。あ。く。ら。に
 ぞ。北。條。が。武。運。場。多。ふ。及。び。て。為。朝。の。子。孫。下。毛。より。起。り。て。日本。國。の
 武。將。と。仰。が。れ。十。餘。代。ハ。相。統。せん。欽。あ。く。ら。に。八。郎。何。を。恨。入。迹。と。八。丈。の
 末。嶋。と。な。り。て。濱。州。白。峯。及。象。頭。山。ハ。神。を。か。よ。し。て。神。威。を。後。世。ハ
 經。る。亦。足。あ。よ。に。榮。る。は。功。成。名。遂。て。身。退。く。ハ。人。間。の。上。策
 なり。と。く。ゆ。べ。と。促。せ。ハ。為。朝。の。これ。を。以。て。快。け。ら。ら。美。ひ。頼。朝
 孤。弱。の。流。人。と。して。小。賢。く。も。我。兵。を。起。し。清。盛。の。氏。族。を。討。ち。割。せ。し
 武。運。の。高。ま。よ。叔。父。の。途。み。り。たり。君。父。の。仇。人。滅。く。ら。れ。亦

春紀卷十又三代



寺の
白
遙
下
為
朝
七



新
言
白
野
日
林
通
篇
十
物
卷
三
五

〇
十
七

誰を離し、誓ふべし速に故國へ歸りて、瀨波院の山陵にて、壯く死切らるの外、と辭をいふら奉り、捺し、之つども牙を起し、多に福祿壽仙若介として、八郎の忠孝信義の乾坤に通じ、鬼神合一、求じて道を行かれん。死すといふも、滅るることなく、生すといふも、神に丹、歸國の准、御舟車に及らば、瀨波院の御人迎へ、述べまねと告め、あはれ、ふ紫雲、駿隼として、東のこより、矢引つ、雲の中より、為朝の光源九郎、為神、白雉姫、りとも、お保元の合戦、討死せし、箭先、拂の須藤九郎、透向、討、惡七、別當、手取の與二、同、子三、打手の紀八、大矢の新、越矢の源太、吉田の兵衛、松浦の二郎、左中太を首とし、九七騎の勇士をおて、為仲、真先、小馬、牽、向、後、て、久し、や、舎、兄の君、去、し、年、の十月、あ、瀨波院の仰、と、稟、佳、奇、呂、麻、人、小、火、急、を、告、林、太、夫、し、て、お、ん、牙、夫、婦、を、救、せ、り、の、は、か、く、す、う、け、乃、仲、ん、今、の

と、や、つ、君、も、父、も、信、じ、ま、い、び、の、あ、ま、り、と、呼、び、か、け、れ、為、朝、を、欣、然、と、ま、し、ら、し、む、ら、し、む、を、め、れ、勿、心、地、雲、ふ、う、れ、衆、を、れ、件、の、馬、ふ、ら、し、騎、め、ハ、為、仲、白、雉、左、右、の、雲、を、楚、と、取、り、これ、を、こ、え、つ、舜、天、丸、を、あ、ら、も、あ、ら、れ、ぞ、さ、し、照、れ、最、君、あ、じ、侍、多、く、の、母、君、も、情、は、し、つ、が、身、ひ、と、め、を、笛、お、き、て、ほ、り、あ、の、形、は、は、ひ、多、く、と、叫、び、多、く、の、紀、平、治、の、り、あ、も、に、手、を、抗、声、を、つ、り、ま、て、盡、ぬ、名、残、と、惜、る、松、寿、鶴、亀、林、太、夫、あ、も、亦、只、児、の、母、小、別、是、猿、の、抄、ま、と、あ、つ、て、お、と、く、あ、れ、よ、く、と、む、り、お、招、く、か、ひ、ひ、つ、き、天、の、原、あ、り、ま、け、え、れ、ハ、八、重、雲、の、霞、よ、ま、ま、り、れ、て、こ、え、え、と、な、り、ぬ、

第六十八回 中山府に舜天位なり即神を祭り樂を奏して大團圓

舜天丸の母小別れてより、沈瀾いよも乾きけり今亦父お捨られて良傷

琉球は且
人々は
壽の字を
りて遊
福窓茶
活の本

まをくかかたなく。轉輾つめくられまへ紀平治松壽鶴龜ふの尉心め
かしてせんぞとふに福祿壽仙これをもて舜天丸ふり、な歎れあひそ
孝子の哀れども生を滅せと名を揚親を顕せん則孝の終りなきを
松壽紀平治亦いひや舜天丸俱して立久了。國の大分を漢道らし
これ亦なぐ福せんり祭祀ある毎より肖像を造りて拜林ゆきし
又元三ふつが像を畫れて壁に貼るべしその家きて福ありんされハ國王
一代毎ハ國ハ異人ハ誕生せんこれより再誕する所形容の肖と成
んてまをれをまつり民間に誕生せん宮中ハ養ひとりて禍福吉凶を問
ふわくハ郷音の物もあつるごとく。そのりの究りて聰明めて女さこ母近
つゝこさうん只壽の字とりて姓ハ賜へははいひ喻とをせんといれど
あまの小天機を漏らるるが却國ハ禍あらん勢覚しあといひくそ地
小身を起し鶴の背より跨りて巴麻嶋のこへ飛去るハ舜天丸其後
容をあらとめ志心してあつて伏拜と坐し感嘆をりたる。かゝり紀平治
松壽亦ハ舜天丸を慰めつ浦添の城へ冊き入れてあぐり即位のてを
勸め身茲ハ二月ハ辰日吉日として中山府の龍宮城ハ即位の規式ハ
その行ハ行ハ舜天丸ハ脱ぎに道よりて中山王の位ハ即龍宮城と更て
即歡會殿と号し舜天王と稱し多人ハ諸司百官袖をけりてさみ萬歳
とぞ唱りた時ハ大日本後鳥羽院の文治三年冬十二月十五日舜天丸の
年十七歳ハ南嶋志しの舜天即位の年二十とより諱を尊敷とぞせりしれ中ハ國中ハ大赦
と行れて林太夫ハ女兒ハ久米子と唱ると内侍と又松壽ハ女兒ハ小萩時ハ
ハふれて王妃と定む父の功を賞せんふん又紀平治と法司と松壽と
國舅とハ鶴を國宰とハ龜ハ紫巾信とハ林を夫以下ハの位階とすりて

昔ハ紀平治ハ長月ハ合貴ハ長月ハ夫ハ...

封戸を増加大倉庫を開けて國氏を賑給る。されば國中の良賤
 老弱ハ為朝の升仙（せんせん）の儀ハ侍りて魚鱉の水とるれり如く
 類とめりてらら歎れらる。俄頃ハ舜天子即てこの善政を行は
 ずは海月の骨あめらして飲ぶと浪りなく。こゝろ遙か声市も満ぬ
 さらば舜天王の諸の功臣と會へて宴ふ。夫虬龍の國の冠も
 おその珠をりて金とせん。こゝろあつて琉と球との兩顆の珠ハ玉城の
 東岳ハ瘞てその餘殃をばら。今より真鶴の空劍と彼金の牌とりと。
 傳國の神器と承く。永く傳へ遺えんと。あめらいう。あめらうへ。衆皆
 あつて。七星山の北のこゝ安里橋のほとり。小宮柱としく建て仙傳の征
 箭二條を天照皇太神ハ幡太神と存ひたり。又為朝の像見のついでハ即
 明神の神体とし。二社の相殿これを安里のハ幡宮と号せ。又天嶺なる
 天孫廟を再興。又波上の社。洋の社。尸乘那の社。普天間の社。末吉の社
 少を建立て。熊野の神を存ひ祀り。阿蘇明神。崇徳天皇。稻荷天満
 天神ハ併り。舜天王（しんてん）の壽星老上。蓬萊の樂を制て。松壽が嫡男
 高満。ホとて里之子の年少。少のの教てこれを習ひ。諸神の祭祀ある
 必らの樂を奏させ。又國の大祀。宗廟の祭祀ある。那覇の土官ら。ひま
 りて。手洗井の畔。水大れる。斧松一株を立。又白鶴二羽を造りて。飛鳴
 相向ふ状のふし。紙皮して。假山を造りて。草花を栽。鏡じ。一の老人と
 二鹿を彫りて。山呼祝壽の状をなす。これハ福祿壽仙ハ表せり。
 されば日本重工の福祿壽を圖する。鹿と鶴を従ひ。又小書。卷
 次のこと。この仙の相。舜天九兵書を傳授。あつて。表せり。又

新編 皇代通記 卷之五 七十一

琉球あて今小羊首（このとらめど）毎（ごと）ふ少女（こ）子（ら）ホ（）が板舞（い）の哉（や）といふとをさるる。
その光景（あ）巨（お）な板（い）を木椿（き）の上（う）横（よ）へ入（い）る西（に）の（）下（した）を（）さ（）う（）ま（）る（）ことと
二（に）尺（じ）む（）り（）二（に）女（に）板（い）の上（う）対（たい）ひ（）ま（）て（）一（い）起（お）ま（）六（む）一（い）為（い）勢（ま）ひ（）お（）就（ま）て（）躍（た）起（た）る
と五六尺（い）よ（）至（い）れ（）あ（）れ（）ど（）も傾（つ）跌（ま）欹（さ）側（た）と（）ほ（）信（し）信（ん）これ（い）ハ（）為（い）朝（あ）牛（う）仙（せん）
あて雲（う）の中（ち）へ入（い）り（）あ（）ふ（）床（し）を（）表（ひ）す（）り（）又（また）九月（く）九（じ）日（に）お（）い（）ら（）る（）毎（ごと）ふ（）龍（り）潭（ん）の水（み）お
舟（ふ）を（）う（）久（く）て（）毎（ごと）舟（ふ）小（こ）鼓（こ）を（）設（し）練（れ）衣（い）し（）る（）童（どう）子（し）これ（い）を（）舁（か）り（）て（）節（せ）瓜（か）な（）せ（）ば
前後（ぜん）後（ご）ふ（）二（に）童（どう）子（し）あり（）て（）一（い）人（に）ハ（）旗（は）を（）執（と）一（い）人（に）ハ（）鑼（ら）を（）舁（か）り（）て（）鼓（こ）と（）相（あ）應（い）龍（り）舟（ふ）太（た）平（へい）
の詞（こと）を（）唱（な）ぶ（）武（ぶ）德（とく）遠（えん）た（）ふ（）及（およ）び（）て（）毒（どく）虺（けい）を（）退（たい）治（ち）し（）洲（し）民（みん）永（えい）く（）治（ち）平（へい）と（）言（い）ふ（）て（）海（う）國（こく）
長（ち）小（こ）恩（おん）を（）蒙（ま）り（）忠（ち）を（）竭（き）と（）端（たん）々（たん）と（）今（いま）お（）恒（こ）例（れい）と（）な（）れ（）り（）と（）或（ある）ハ（）い（）ハ（）中（ち）葉（え）
琉球（り）三（さん）山（さん）よ（）こ（）り（）て（）蛮（ま）觸（し）の（）あ（）ら（）と（）止（と）と（）れ（）ら（）り（）比（ひ）諸（し）神（しん）社（しゃ）類（るい）破（は）
ころり（こ）ろ（）を（）尚（し）泰（たい）王（わう）の時（とき）八（は）幡（ばん）宮（みやう）を（）再（さい）自（じ）し（）尚（し）元（げん）王（わう）の（）と（）林（りん）太（た）夫（ふ）が（）子（し）孫（そん）

